

## 線形計画問題

制約条件が 1 次の等式あるいは不等式で表されるときに、1 次関数である目的関数を最大化（あるいは最小化）する問題。

### 講義内容

LP1 線形計画問題による定式化の例

LP2 諸定義（可能解，最適解，標準形，基底解，基底変数，非基底変数，基底可能解）

LP3 シンプレックス法

結局、以下の問題を解けばよいことになる。

$$\begin{aligned} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 &\leq b_1, \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 &\leq b_2, \\ a_{31}x_1 + a_{32}x_2 &\leq b_3, \end{aligned}$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

という制約条件のもとで、目的関数

$$c_1x_1 + c_2x_2$$

を 最大 にするような  $x_1, x_2$  を求めよ。

LP1 線形計画問題による定式化の例

[例 1]

- 3 種類の材料 1 ~ 3 から 2 種類の商品 1, 2 を作る。
- 商品  $j$  を 1 単位作るのに、材料  $i$  が  $a_{ij}$  だけ必要 ( $i = 1, 2, 3, j = 1, 2$ )。
- 材料  $i$  の使用可能量は全部で  $b_i$ 。
- 商品  $j$  の 1 単位あたりの売り上げは  $c_j$ 。
- 総売り上げを最大にしたい。

各商品  $j$  を  $x_j$  単位作るものとする ( $j = 1, 2$ )。

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0.$$

- 商品  $j$  を 1 単位作るのに、材料  $i$  が  $a_{ij}$  必要。  
⇒  $x_j$  単位作るのに、材料  $i$  が  $a_{ij}x_j$  必要。
- 材料  $i$  の使用可能量は全部で  $b_i$ 。  
⇒ 商品 1, 2 のための使用量の和を考えると,  
$$a_{i1}x_1 + a_{i2}x_2 \leq b_i. \quad (i = 1, 2, 3)$$
- 商品  $j$  の 1 単位あたりの売り上げは  $c_j$ 。  
⇒ 総売り上げは  $c_1x_1 + c_2x_2$ 。

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \\ a_{31} & a_{32} \end{bmatrix}, \quad x = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix},$$

$$b = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}, \quad c = \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \end{bmatrix}$$

とおくと、

目的関数 :  $c^T x \rightarrow \text{最大}$

制約条件 :  $Ax \leq b, x \geq 0$

と書くことができる ( ${}^T$  は転置を表す)。

[例 2]

- 4 種類の食品  $F_1 \sim F_4$  から 3 種類の栄養素  $N_1 \sim N_3$  をとる。
- 1 単位の食品  $F_j$  には、栄養素  $N_i$  が  $a_{ij}$  含まれる ( $i = 1, 2, 3, j = 1, 2, 3, 4$ )。
- 栄養素  $N_i$  の最低必要量は  $b_i$ 。
- 1 単位の食品  $F_j$  の価格は  $c_j$ 。
- 総費用を最小にして、最低限必要な栄養素をとりたい。

各食品  $F_j$  を  $x_j$  単位買うものとする .

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0.$$

- 1 単位の食品  $F_j$  には ,  $N_i$  が  $a_{ij}$  含まれる .  
 $\Rightarrow x_j$  単位には ,  $N_i$  が  $a_{ij}x_j$  含まれる .
- 栄養素  $N_i$  の最低必要量は  $b_i$  .  
 $\Rightarrow 4$  種類の食品中の  $N_i$  の量を考慮すると ,  
 $a_{i1}x_1 + a_{i2}x_2 + a_{i3}x_3 + a_{i4}x_4 \geq b_i$ .
- 1 単位の食品  $F_j$  の価格は  $c_j$  .  
 $\Rightarrow$  総費用は  $c_1x_1 + c_2x_2 + c_3x_3 + c_4x_4$  .

以下の問題を解けばよいことになる .

$$\begin{aligned} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + a_{13}x_3 + a_{14}x_4 &\geq b_1, \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + a_{23}x_3 + a_{24}x_4 &\geq b_2, \\ a_{31}x_1 + a_{32}x_2 + a_{33}x_3 + a_{34}x_4 &\geq b_3, \\ x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0 \end{aligned}$$

という制約条件のもとで , 目的関数

$$c_1x_1 + c_2x_2 + c_3x_3 + c_4x_4$$

を 最小 にするような  $x_1, x_2, x_3, x_4$  を求めよ .

$$\begin{aligned} A &= \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} & a_{34} \end{bmatrix}, \quad \mathbf{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{bmatrix}, \\ \mathbf{b} &= \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{c} = \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ c_3 \\ c_4 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

とおくと ,

目的関数 :  $\mathbf{c}^T \mathbf{x} \rightarrow$  最小

制約条件 :  $A\mathbf{x} \geq \mathbf{b}, \mathbf{x} \geq \mathbf{0}$

となる .

## LP2 諸定義

### LP2.1 可能解と最適解

- 実行可能解 , 可能解 ( feasible solution ): 全ての制約条件を満たすベクトル
- 可能領域 ( feasible region ): 可能解全体の集合
- 最適解 ( optimum solution ): 最大化問題の場合 , 全ての可能解の中で目的関数の値を最大にするもの . 最小化問題の場合 , 全ての可能解の中で目的関数の値を最小にするもの .

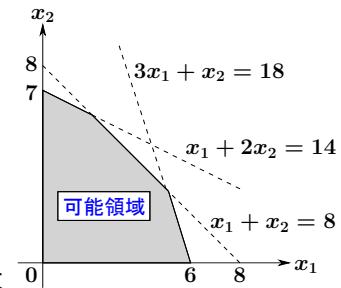
### [例 3]

制約条件

$$\begin{aligned} x_1 + 2x_2 &\leq 14 \\ x_1 + x_2 &\leq 8 \\ 3x_1 + x_2 &\leq 18 \\ x_1 \geq 0, x_2 \geq 0 \end{aligned}$$

目的関数

$$2x_1 + x_2 \rightarrow \text{最大}$$



$$K \stackrel{\triangle}{=} 2x_1 + x_2 \text{ とおく } \Rightarrow x_2 = -2x_1 + K.$$

$K$  の値をいろいろ変えて , 傾き  $-2$  の直線を書き込むと , 可能領域を通るものの中で  $K$  の値が最大になるのは  
 $x_2 = -2x_1 + 13$  .

この直線は , 可能領域内の点  $(5, 3)$  を通るので , 最適解は  $(x_1, x_2) = (5, 3)$  .

[例4]

制約条件

$$x_1 + 2x_2 \geq 6$$

$$-x_1 + x_2 \geq -3$$

$$3x_1 + x_2 \geq 6$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

目的関数

$$x_1 + x_2 \rightarrow \text{最小}$$

$$K \triangleq x_1 + x_2 \text{ とおく} \Rightarrow x_2 = -x_1 + K.$$

例3と同様に、傾き

-1の直線を考える

と、可能領域を通る

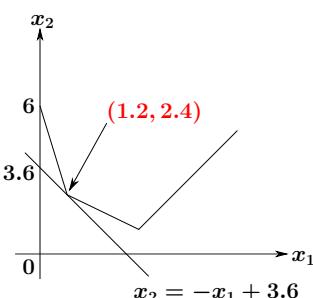
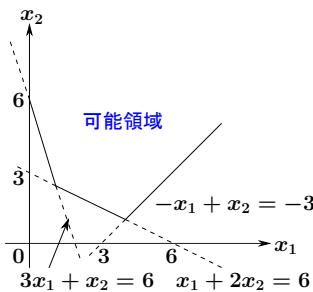
ものの中でKの値が  
最小になるのは

$$x_2 = -x_1 + 3.6.$$

この直線は、可能領

域内の点(1.2, 2.4)

を通るので、最適解は $(x_1, x_2) = (1.2, 2.4)$ .



## LP2.2 標準形

以下の形式を標準形 (standard form) と呼ぶ。

目的関数 :  $c^T x \rightarrow \text{最小}$

制約条件 :  $Ax = b, x \geq 0$

$x$  : 变数の  $n$  次元ベクトル

$A$  :  $m \times n$  定数行列

$b$  :  $m$  次元定数ベクトル

$c$  :  $n$  次元定数ベクトル

非標準形を標準形に直すことは容易にできる。

(1) 不等式制約条件がある場合

$$x_1 + 2x_2 \leq 14, \quad x_1 + x_2 \leq 8,$$

$$3x_1 + x_2 \leq 18, \quad x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

↓

$$x_1 + 2x_2 + x_3 = 14, \quad x_1 + x_2 + x_4 = 8,$$

$$3x_1 + x_2 + x_5 = 18,$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0, x_5 \geq 0$$

このような变数  $x_3, x_4, x_5$  のことをスラック  
变数 (slack variable) と呼ぶ。

$$x_1 + 2x_2 \geq 6, \quad -x_1 + x_2 \geq -3,$$

$$3x_1 + x_2 \geq 6, \quad x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

↓

$$x_1 + 2x_2 - x_3 = 6, \quad -x_1 + x_2 - x_4 = -3,$$

$$3x_1 + x_2 - x_5 = 6,$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0, x_5 \geq 0$$

このような变数  $x_3, x_4, x_5$  のことを剩余变数  
(surplus variable) と呼ぶ。

(2) 非負条件がない变数がある場合

そのような各变数  $x_i$  に対して、二つの非負变  
数  $x'_i, x''_i$  を作り、 $x_i$  を  $x'_i - x''_i$  で置き換える。

(3) 最大化問題である場合

次の例のように、 $c^T x$  の最大化は  $(-c)^T x$  の  
最小化に変える。

$$2x_1 + x_2 \rightarrow \text{最大}$$

↓

$$-2x_1 - x_2 \rightarrow \text{最小}$$

[例5] 例3の問題を標準形に直すと、以下よう  
になる。

目的関数 :  $c^T x \rightarrow \text{最小}$

制約条件 :  $Ax = b, x \geq 0$

ただし、

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 3 & 1 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}, \quad x = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{bmatrix},$$

$$b = \begin{bmatrix} 14 \\ 8 \\ 18 \end{bmatrix}, \quad c = \begin{bmatrix} -2 \\ -1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}$$

標準形に関して，次の二つの仮定をする．

- $n > m$  . すなわち，変数の個数は，変数の非負条件以外の制約条件の個数より大きい．
- 制約条件の中に，他の条件式を組み合わせて得られるような冗長なものがない．

これ以降，上記の仮定を満たすような，標準形の線形計画問題について考える．

### LP2.3 基底解，基底可能解

目的関数： $c^T x \rightarrow \text{最小}$

制約条件： $Ax = b, x \geq 0$

- ベクトル $x$ の $n$ 個の成分 $x_j$  ( $j = 1, 2, \dots, n$ ) を， $m$ 個と $n - m$ 個のグループに分け，それぞれのグループについて，成分を並べたベクトルを $x_B, x_N$ と表す．
- そのグループ分けに対応して， $A$ を $m \times m$ 行列と $m \times (n - m)$ 行列に分けたものを，それぞれ， $B, N$ と表す．

[例6] 例5の問題における $x$ の5( $= n$ )個の成分を，3( $= m$ )個の成分 $x_1, x_3, x_4$ と2( $= n - m$ )個の成分 $x_2, x_5$ に分けたとすると， $x_B, x_N, B, N$ は以下のようになる．

$$\begin{aligned} x_B &= \begin{bmatrix} x_1 \\ x_3 \\ x_4 \end{bmatrix}, \quad x_N = \begin{bmatrix} x_2 \\ x_5 \end{bmatrix}, \\ B &= \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 1 \\ 3 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad N = \begin{bmatrix} 2 & 0 \\ 1 & 0 \\ 1 & 1 \end{bmatrix} \\ A &= \left( \begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 3 & 1 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \right) \end{aligned}$$

- 制約条件  $Ax = b$  は

$$Bx_B + Nx_N = b$$

と書き直すことができる．

$x_N = 0$  とおくと， $Bx_B = b$  . よって，このとき， $B$ が正則であれば， $x_B$ の値は一意に  $x_B = B^{-1}b$  と定まる．

このようにして得られる特殊な解を基底解 (basic solution) と呼ぶ．

また， $x_B$ の各成分を基底変数 (basic variable)， $x_N$ の各成分を非基底変数 (nonbasic variable) という．

[例7] 例5の問題において，

$$x_N = \begin{bmatrix} x_2 \\ x_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$$

とすると，

$$Bx_B = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 1 \\ 3 & 0 & 0 \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} x_1 \\ x_3 \\ x_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 14 \\ 8 \\ 18 \end{bmatrix}$$

この方程式を解くと， $x_1 = 6, x_3 = 8, x_4 = 2$  . これに  $x_2 = 0, x_5 = 0$  をあわせたものが一つの基底解をなす．

$$x_N = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$$

とすると，

$$Bx_B = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 1 \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} x_2 \\ x_3 \\ x_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 14 \\ 8 \\ 18 \end{bmatrix}$$

これを解くと， $x_2 = 8, x_3 = -2, x_5 = 10$  . よって， $(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 8, -2, 0, 10)$  は一つの基底解．ただし，これは可能解ではない．

- 一般に，可能解は無限に存在するが，基底解の個数は有限（高々  $nC_m$  個）。
- 基底解は可能解であるとは限らない。基底解のうち，可能解でもあるものを基底可能解（basic feasible solution）と呼ぶ。

次の定理が成立する（証明は省略）。

[ 定理 ] 線形計画問題が最適解をもつならば，基底可能解の中に最適解が存在する。

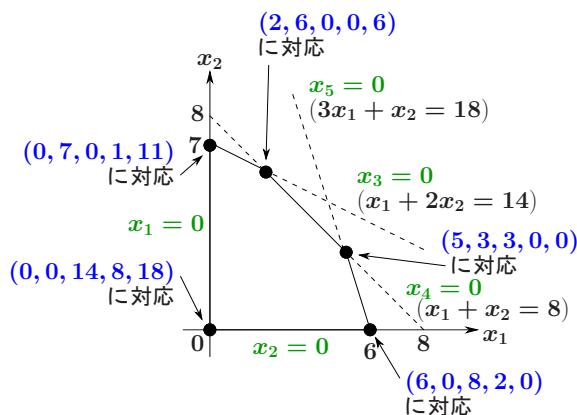
[ 例 8 ] 例 5 の問題の場合，以下のように，基底解は  ${}_5C_3 = 10$  個ある。

基底可能解（可能領域の頂点に対応）

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 0, 14, 8, 18), (0, 7, 0, 1, 11), \\ (6, 0, 8, 2, 0), (2, 6, 0, 0, 6), (5, 3, 3, 0, 0)$$

可能解でない基底解

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 8, -2, 0, 10), \\ (0, 18, -22, -10, 0), (14, 0, 0, -6, -24), \\ (8, 0, 6, 0, -6), (22/5, 24/5, 0, -6/5, 0)$$



### LP3 シンプレックス法

標準形の線形計画問題の最適解をシンプレックス法（simplex method）により求める手順について，例 5 の問題を例として用いながら説明していく。

[ シンプレックス法の概略 ]

- Step.1：基底可能解を一つ見つける。
- Step.2：この基底可能解が最適解かどうかの判定を行う。最適解であれば終了。
- Step.3：より良い基底可能解を求め，Step.2 へ行く。

Step.1 最初の基底可能解を見つける。

- 一般的の問題に対する方法は必ずしも自明なものではないが，ここでは省略する。
- （変数の非負条件以外の）各制約条件がスラッシュ変数を含んでいる場合などには，このステップは簡単に実行することができる。

[ 例 9 ] 例 5 で述べた問題は以下のとおり。

制約条件

$$x_1 + 2x_2 + x_3 = 14 \\ x_1 + x_2 + x_4 = 8 \\ 3x_1 + x_2 + x_5 = 18 \\ x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0, x_5 \geq 0$$

目的関数： $-2x_1 - x_2 \rightarrow \text{最小}$

この場合， $(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 0, 14, 8, 18)$  は基底可能解である。

この基底可能解に対し， $x_B, x_N, B, N$  は以下のようになる。

$$x_B = \begin{bmatrix} x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{bmatrix}, x_N = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix},$$

$$B = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 3 & 1 & 0 \end{bmatrix}, N = \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}$$

## Step.2 基底可能解の最適性の判定

$$Bx_B + Nx_N = b$$

であるので，

$$x_B = B^{-1}b - B^{-1}Nx_N$$

である（基底変数を非基底変数の関数として表している）。これにより，目的関数を，非基底変数のみの関数として表すことができる。

$x$  の ( $x_B$  と  $x_N$  への) 分割に対応して，目的関数の係数ベクトル  $c$  も， $c_B$  と  $c_N$  に分割する。

$$\begin{aligned} c^T x &= c_B^T x_B + c_N^T x_N \\ &= c_B^T B^{-1}b + (c_N^T - c_B^T B^{-1}N)x_N \\ &= z_0 + \sum_{j \in NS} (c_j - z_j)x_j \end{aligned}$$

ただし，ここで

$$z_0 = c_B^T B^{-1}b : \text{現在の基底可能解に対する目的関数値，}$$

$NS$ ：非基底変数の添字の集合，

$$z_j = c_B^T B^{-1}a_j \quad (a_j \text{ は行列 } A \text{ の第 } j \text{ 列ベクトル}) .$$

$$\begin{bmatrix} c_B^T B^{-1} \\ 1 \times m \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} N \\ a_{j_1} \ a_{j_2} \\ m \times (n-m) \end{bmatrix}$$

$$c^T x = z_0 + \sum_{j \in NS} (c_j - z_j)x_j$$

各  $j \in NS$  について， $c_j - z_j$  は，非基底変数  $x_j$  の変化に対する目的関数の変化率を示す。

すべての  $j \in NS$  について  $c_j - z_j \geq 0$  であるとき，任意の可能解を  $x'$ ，その目的関数値を  $z'$  とすると，

$$z' = z_0 + \sum_{j \in NS} (c_j - z_j)x_j \geq z_0.$$

よって，現在の基底可能解は最適解である。

## Step.3 解の改良

$c_j - z_j < 0$  であるような値  $j \in NS$  が存在するとき，それらのうち， $c_j - z_j$  が最小となるものを一つ選んで  $p$  とする。

$x_p$  以外の非基底変数の値を 0 のままにしておいて， $x_p$  の値を 0 から  $\Delta (\geq 0)$  に増加させることにより，目的関数の値を

$$(z_p - c_p)\Delta$$

だけ減少させ得る。 $\Delta$  の値は，可能解でなくならない範囲で，最大になるように決める。

（これにより， $x_p$  は基底変数に変わり，他のある変数が非基底変数に加わる。）

Step.2 に戻る。

（例 9 の続き）

### Step.2 (1 回目)

例 5 で述べた問題と基底可能解  $(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 0, 14, 8, 18)$  に対して，目的関数  $z$  は

$$z = -2x_1 - x_2 \quad (1)$$

（この場合  $z_0 = 0$ ）。 $x_1, x_2$  のいずれの係数も負であるから，最適解ではない。

### Step.3 (1 回目)

$p = 1$  とする ( $p_1$  を基底変数に変えていく)。基底変数  $x_3, x_4, x_5$  を非基底変数  $x_1, x_2$  で表すと，

$$x_3 = 14 - x_1 - 2x_2, \quad (2)$$

$$x_4 = 8 - x_1 - x_2, \quad (3)$$

$$x_5 = 18 - 3x_1 - x_2 \quad (4)$$

となる。よって， $x_2 = 0$  としたまま， $x_1 (= x_p)$  の値を  $\Delta (> 0)$  まで増加させると，

$$x_3 = 14 - \Delta, \quad x_4 = 8 - \Delta, \quad x_5 = 18 - 3\Delta$$

となる。

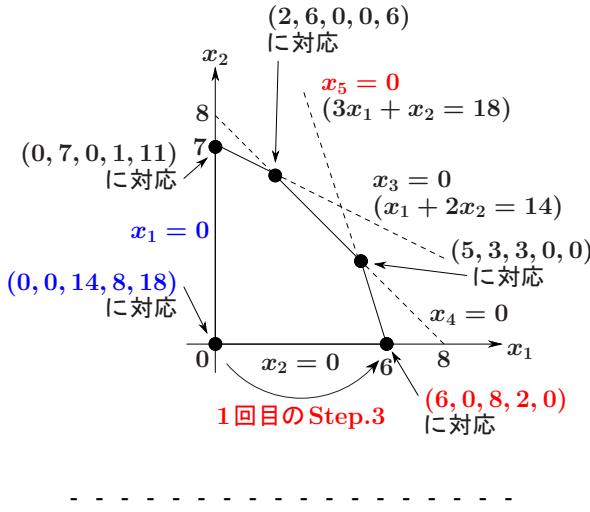
$x_3 \geq 0, x_4 \geq 0, x_5 \geq 0$  である範囲で  $\Delta$  の値を最大にするので，

$$\Delta = 6.$$

これにより、新しい基底可能解

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (6, 0, 8, 2, 0)$$

が得られる。このときの目的関数値は  $-12$ 。 $x_1$  が基底変数に加わり、 $x_5$  が非基底変数に変わっている。



Step.2 (2回目)

式(4)を変形して

$$x_1 = 6 - \frac{1}{3}x_2 - \frac{1}{3}x_5 \quad (5)$$

を得る。これを式(1)に代入すると、

$$z = -12 - \frac{1}{3}x_2 + \frac{2}{3}x_5 \quad (6)$$

となる。 $x_2$  の係数が負であるから、最適解ではない。

Step.3 (2回目)

$p = 2$  とする。式(5)を式(2), (3)の右辺に代入し、整理すれば

$$x_3 = 8 - \frac{5}{3}x_2 + \frac{1}{3}x_5 \quad (7)$$

$$x_4 = 2 - \frac{2}{3}x_2 + \frac{1}{3}x_5 \quad (8)$$

となる。式(5), (7), (8)において、 $x_2 = \Delta$ ,  $x_5 = 0$  とすると、

$$x_1 = 6 - \frac{1}{3}\Delta, \quad x_3 = 8 - \frac{5}{3}\Delta, \quad x_4 = 2 - \frac{2}{3}\Delta$$

となる。

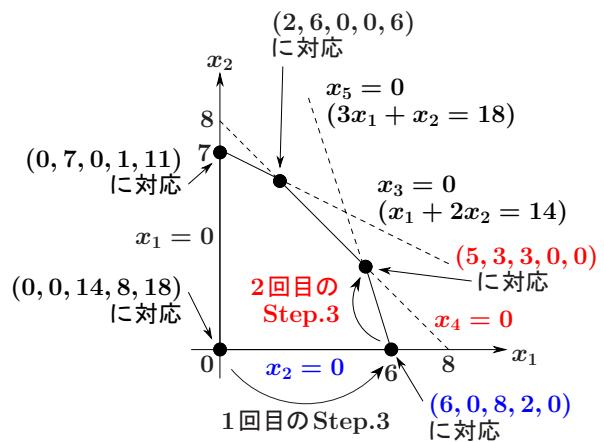
$x_1 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0$  である範囲で  $\Delta$  の値を最大にするので、

$$\Delta = 3.$$

これにより、新しい基底可能解

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (5, 3, 3, 0, 0)$$

が得られる。このときの目的関数値は  $-13$ 。 $x_2$  が基底変数に加わり、 $x_4$  が非基底変数に変わっている。



Step.2 (3回目)

式(8)を変形して

$$x_2 = 3 - \frac{3}{2}x_4 + \frac{1}{2}x_5 \quad (9)$$

を得る。これを式(6)に代入すると、

$$z = -13 + \frac{1}{2}x_4 + \frac{1}{2}x_5 \quad (10)$$

となる。 $x_4, x_5$  のいずれの係数も非負であるから、

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (5, 3, 3, 0, 0)$$

は最適解である。終了。